

こちら特報部

反対論者は徹底排除

東大工学部原子力工学科卒業生にも、原発推進に異を唱えた人がいる。同学科一期生の「安齋科学・平和事務所」（京都市）所長の安齋育郎（立命館大学名誉教授）は、学生時代から原発の安全性に疑問を唱え続けてきた。「夢と希望を持って学び始めたが、緊急炉心冷却装置の実証性があまい点など、重要な問題を積み残して突っ走りつつあることが分かり、原発に批判的になった」と振り返る。

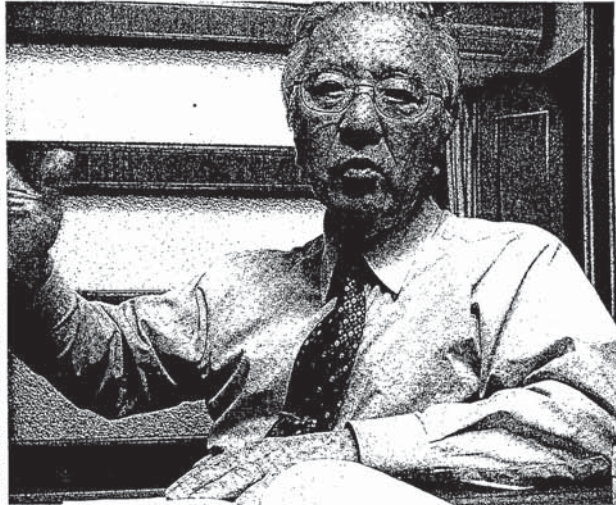
七二年の日本学術会議第一回原発問題シンポジウムで、当時三十二歳の安齋氏は原発の問題点を指摘。以来「原子力を担う高級技術者を育てる学科を出た人間が、国策に反対するのは許せない」と、

放射線測定のため土壌を採取する安齋氏
4月16日、福島大船町で（同氏提供）



専門家 今こそ責務を

構造変えられず「メディア側にも責任」



と、徹底的にマークされたといふ。

「主任教授は『安齋を干すことになった』とい、研究室メンバーは誰も私と口をきかない。教育業務からも外された。それでも教えてもらいたいという大学院生には、廊下ですれちがいに『赤門前の旅館に来い』『千駄木のすし屋にいる』と伝えて校外で会った。研究発表も教授の許可制だといわれた。

「無視して発表したのが、金のかかる研究はで

「今こそ原子力専門家が能力を発揮する時だ」と語る安齋育郎氏＝京都市で

きなかった。国策に沿う研究でない金も出ず、業績が上がらない仕組みだ。さらに国は原発推進の権威付けに学者を各種委員に登用し、原子力村構成員としての人間関係を培われた」と、国が学者を取り込む様子を解説する。

学生時代から警鐘を鳴らし続けてきた原発事故が起きてしまった。安齋氏は「今こそ研究者、技術者が役割を果たす時だ」と強調する。

「全国の原発は五十四

基。事故を起こす可能性がある」と言っていたが、そのある原発を管理するの通りだと思ふ」と、自身を含めて、メディア側は、高い技術的力量がい。廃炉には数十年かかる。放射線研究も必要や手法を変えられなかった。事態を直視して解決するため力を発揮するのは、原子力専門家しかあり得ない。皆に期待している」と、専門家の奮起を呼び掛けている。

安齋氏自身も行動を続けている。震災後に福島県入りして放射線量を測定。福島市内の保育園では、窓際は相対的に放射線量が高く、部屋を中心に部では下がることが確認した。

「園庭に積もった放射性物質が重要な被ばく原因になっている。まず園庭の土を削って被ばく量を少なくしなければいけない」と、講演などを通じて早期対応の必要性を訴えている。

同学科六期卒業生でジャーナリストの原淳二郎氏（むも）も「脱原発」を主張してきたOBの一人だ。原氏は長くITやエネルギーを担当した元朝日新聞記者。「先輩が『原子力批判が、原子力村にいる人たちの胸に届かなかった』ことに責任を感じ

「技術者らは、社会やメディアに理解されないのいら立ちから黙り込んでしまっているのかも。出来ない。だが、東電や経済産業省原子力安全・保安院などが言っていることが本当に正しいのかどうか、現場をよく知る技術者は沈黙を破って今こそ発信してほしい」と

FRONTLINE

フクシマ以来、「日本は科学大国」という神話も地にまみれた。汚水処理もロボットの技術も外国の借り物、メルトダウンの事実さえ把握できず、放射能の影響は「現時点で大丈夫」を繰り返す。日本の原子力技術者は世界の笑いものだ。なぜこつも惨めな事態に陥ったのか。この点を検証しなくては。（充）

原発の危機